

2. 対象事業の目的および内容

2.1 事業の背景・目的

大倉山ジャンプ競技場と宮の森ジャンプ競技場は、1972年冬季オリンピック札幌大会に向けて整備した施設である。国際スキー・スノーボード連盟(FIS)が定める国際競技規則の改正に伴う改修を重ねながら、三度のアジア冬季競技大会や2007年のノルディックスキー世界選手権、FISジャンプワールドカップ等、これまで様々な国際大会が開催され、札幌市がウインタースポーツ都市であることを象徴する施設となっている。

さらに、大倉山では「札幌オリンピックミュージアム」が併設され、山頂の展望台からは、国内有数の夜景である札幌の街並みを一望できる等、スキージャンプの魅力発信はもとより、年間約40万人が来場する貴重な観光施設としての側面も持っている。

そうしたなか、両ジャンプ競技場はジャンプ台の形状が現行の国際競技規則に適合していないことから、今後継続して国際大会を開催できない可能性がある。

ウインタースポーツ都市・札幌を象徴する両ジャンプ競技場が、将来にわたっても、持続的にその機能や価値を維持・向上していくため、大規模改修が必要な状況となっている。

2.2 事業コンセプト・整備方針

2.2.1 課題

大倉山、宮の森両ジャンプ競技場には以下の課題がある。

(1) 国際競技規則に適合していない

両競技場は、選手の飛距離の伸びに対応した最新の国際競技規則に適応していない。そのため、国際大会を継続して開催する上では FIS の公認更新が必要である。また、ジャンプ競技トップ選手の強化・育成環境の整備も重要である。

(2) 施設の老朽化・陳腐化が進行

大倉山ジャンプ競技場は、平成初期にリニューアルしたものの、一部設備の老朽化・陳腐化が進行している。宮の森ジャンプ競技場においては、1972 年当時の施設が多く老朽化が進んでいる。

(3) 「高次機能交流拠点」としての機能強化

大倉山ジャンプ競技場には、「札幌オリンピックミュージアム」が併設され、札幌の街並みを一望できる山頂展望台もあり、年間約 40 万人が訪れる観光施設となっている。将来に渡ってスポーツや観光等といった多様なメッセージを発信していくための機能強化の具体化が必要である。

2.2.2 目指す施設のあり方

本事業は、大倉山ジャンプ競技場(ラージヒル)に宮の森ジャンプ競技場(ノーマルヒル)を移設・併設することである。ジャンプ競技場の併設化(デュアル化)は、それぞれ現地で改修する場合と比較すると、下記効果が期待される。

これにより、大倉山ジャンプ競技場は「世界屈指のウインタースポーツシティ・札幌」の新たなシンボルになることが見込まれる。

【ジャンプ競技場のデュアル化で期待される効果】

- ・ 運営本部棟の共用等により改修費が低減
- ・ 光熱費、点検費、除排雪等の維持管理費の低減
- ・ 選手・関係者の移動、資機材の運搬等、大会運営や選手の強化・育成の効率化
- ・ 練習で使用頻度の多いノーマルヒルでの日常の練習風景を新たな観光資源化に
- ・ 都心からノーマルヒルへのアクセス性向上

2.3 事業計画

2.3.1 諸施設の設定

(1) ジャンプ台プロフィール(線形)

ジャンプ台のプロフィール(線形)は国際競技規則に形状の基準が定められており、本事業ではノーマルヒル、ラージヒルともに最新の2028年国際競技規則に適合するよう改修する。

また、ノーマルヒルのヒルサイズについては、国際競技規則に示されている、ノーマルヒルの最大値を見込む。また、今後の設計によっては数値が変わる可能性が見込まれる。

表 2.3-1 ジャンプ台の線形計画

ジャンプ台	ヒルサイズ(HS)・K点	現状	改修後
ノーマルヒル	ヒルサイズ	100m	109m
	K点	90m	98m
ラージヒル	ヒルサイズ	137m	137m(変更なし)
	K点	123m	123m(変更なし)

(2) 施設の老朽化・陳腐化対応

大倉山ジャンプ競技場の既存設備のうち、デュアル化事業に直接は関わらないものの、老朽化や陳腐化が進み、デュアル化工事で設置する仮設物(クレーン等)を活用することで、効率的に更新ができる設備については、デュアル化事業と一体的に更新する。

【更新対象設備】

ラージヒルサマーヒル用マット、電光掲示板、屋外照明設備、ラージヒル防護板、テレビ中継設備 等

(3) 施設のバリアフリー化

更新時期を迎える大倉山のリフトについて、ゴンドラなど昇降設備のバリアフリー化を検討する。

2.3.2 配置計画

【ノーマルヒル】 ラージヒルの北側に配置

- ・大倉山の既存施設(ランディングエリアや運営本部棟等)をデュアル化後も最大限活用できるため。
- ・1972年冬季オリンピックまで「雪印シャンツェ」が併設されていた場所であり、自然環境への影響を最小限に抑えることができるため。

【昇降設備】 ラージヒルとノーマルヒルの間に配置

- ・運営本部棟側からアクセスする選手や競技関係者、オリンピックミュージアム側からアクセスする観光客、双方の利便性を確保するため。
- ・ラージヒル、ノーマルヒルそれぞれの飛形審判棟からの視界を遮らないようにするため。

【飛型審判棟(ノーマルヒル用)】 国際競技規則に基づく配置

- ・審判の視界を確保するために定められた国際競技規則に準拠。

【観戦スペース】 主にジャンプ台正面に配置

- ・両ジャンプ台ともに選手をより間近に感じられる配置とするため。
- ・イベントでの活用にあたりジャンプ台やオリンピックミュージアム等と連携するなど、自由度の高い活用が期待されるため。

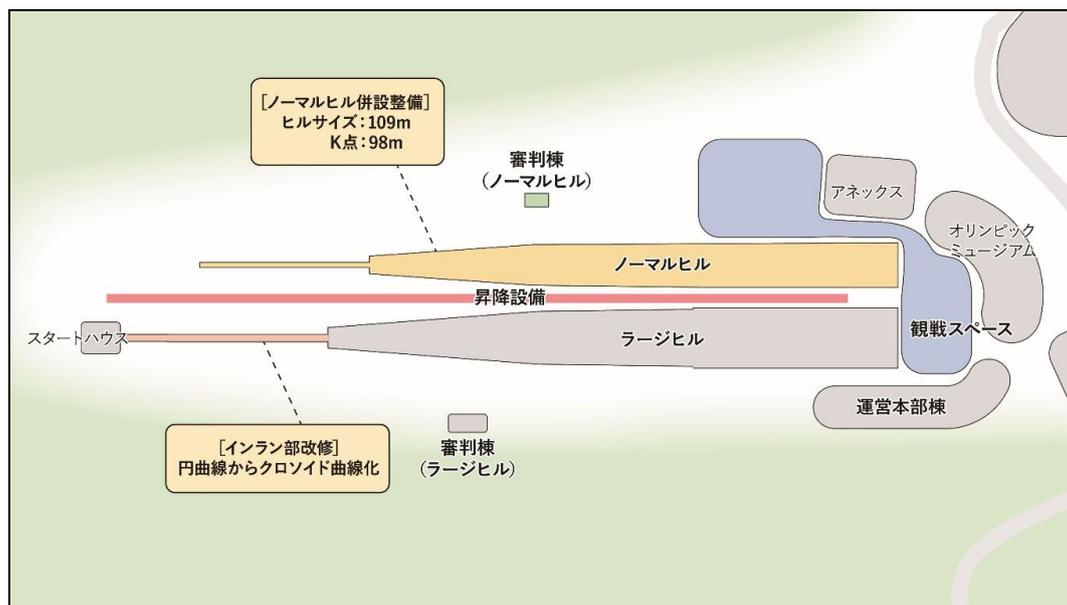


図 2.3-1 計画平面模式図

2.4 事業スケジュール

ラージヒルは、関係機関や競技団体等と連携しながら必要な調査・設計を進め、次回2028年のジャンプ台のFIS公認更新までに改修を終える計画である。

ノーマルヒルについては、環境保全対策として、環境アセスメントに準じた環境調査、環境影響の予測評価を実施し、専門家等からの助言を踏まえた適切な環境対策を講じた上で改修に着手する。

表 2.4-1 事業スケジュール

	2025 R7年度	2026 R8年度	2027 R9年度	2028 R10年度	2029 R11年度	2030 R12年度
ラージヒル	基本設計	実施設計	契約 手続	工事施工		
ノーマルヒル	環境対策 検討	設計・環境対策・工事施工				